



写真5:チ ソギョン。「韓国医学近代化の父」と呼ばれ尊敬を集めている。温厚で広い心と患者への愛情を持つ医師だった様子が、何事も包含しようと手を広く開いている立像から伝わってくる。作者は知らないが、塑像として上手な作品だ。



写真6:チ ソギョンの立像の説明石碑(写真4参照)。定礎が1987年(没後52年目)なので比較的新しい。僅か30年前であるが、この時代の韓国の文章には漢字がまだ半分以上混ざっており、漢字だけ拾うと、なんとなく理解できたような気分になる。歴も西暦になっている。「松村池鐫永先生 朝鮮王朝末 種痘法 導入 普及 近代醫學 開拓者 最初 設立 近代醫學教育機関 官立醫学校 初代校長 醫學教育 先驅者 ……」

### ■「大韓(テハン)医院」の建物と時計塔

さて、話はチ ソギョンから病院に戻る。1907年、韓国の衛生医療の近代化を目指して大韓医院官制が交付された。そして専門設備を持つ漢城(ハンソン)病院(日本居留民団の病院)以外の、小規模であった「大韓医学校」と「廣済院」、「大韓赤十字病院」の3つが統合され、「大韓医院」が設立される。大韓医院は大韓帝国における医療保健行政(衛生、診療、教育)の中枢機関の官庁であり、かつ国の中心としての病院や医学校(4年制)の機能も持った。この大韓医院が朝鮮の医学・医療の西洋化、近代化に大きな貢献をなしていく。大韓医院は廣済院、大韓赤十字病院が行っていた施療の理念を引き継ぎ、貧困層への診療や種痘などを無料で実施する。初代院長は日本人の佐藤進で、明治初期の大物の医師である(チ ソギョンは大韓医院附属医学校の生徒監の教員ポスト)。1908年、大韓医院本館が建設さ



写真7:大韓医院の本館。1907年竣工、翌年完成。格調ある美しい建物だ。塔屋の大時計は109年間、時を刻んできた。

れた。本館建物は凛々しく立派な塔をもつ。赤茶色の煉瓦の建物で、とても美しい。朝鮮医学・医療のシンボルといえる(写真7〜9)。



写真8:大韓医院:玄関上に掲げられた「大韓醫院」の額は、大韓帝国最後の皇太子・英親王(李 垠、り ぎん)による揮毫(複製)。なお皇太子の妃である「李方子妃」は朝鮮王朝に嫁いだ日本皇族の梨本宮方子(なしもとのみや まさこ)妃で、日韓の架け橋として波瀾万丈の人生を送られ、また晩年は障害児教育に人生を捧げた方であられた。



写真9:大韓医院本館の一部。このような容姿も装飾も色調も美しいクラシックの建物は、今日ではなかなか見ることが出来ない。右後方にソウル大学病院本館がみえる。

バロック様式の時計塔は眼の錯覚でイオニア風の白い柱が屋根を45度拵って支えているように見える。そのデザインはよく考えられており、巧みで、素晴らしい。赤煉瓦の建物と白い柱の色彩の組み合わせは、見る人に大きな印象を与える。頂上の屋根(ドーム)はニンニク(大蒜)の花を表しているそうだ。しかしニンニクの花と言われても、頭に思い浮かんでこない(ニンニクはネギの仲間であるので、花はネギ坊主を形成するのだろうか)。車寄せのある玄関はルマン様式、建物壁面はルネサンス様式であろう。各種の西洋建築様式の折衷であるが、バランスの崩れはなく、とても美しく秀逸な建物である。大韓帝国の財務省にあたる度支部(たくしぶ)の設計所が設計したそうだ。この役所は釜山、仁川の税関も設計している。施工は大倉象馬施工(現・大成建設)。この「大韓医院」の建物は後に京城帝国大学医学部附属病院として使用され、朝鮮半島における近代医学の中心となる。ソウル大学医学部も使用し、現在は医療の第一線から引退してソウル大学医学歴史博物館になっている。

余談であるが、大学のシンボルはなんといっても、大時計付きの塔屋だ。大学のシンボルが図書館でなく学塔であるというのも、考えると少し不思議だ。面白い。塔という天を突く建物が持つ威力だ。伝統ある大学の多くは大時計を付けた美しい塔学や校舎を持っている。日本の大学も、例えば、北海道大、東京大、東京工業大、一橋大、早稲田大、慶応大、京都大、同志社大、関西学院大、神戸大、九州大等々、枚挙にいとまない(一橋大が)は図書館に時計塔)。余談

だが「校塔に 鳩多き日や 卒業す」(中村草田男)は高校時代から私が大好きな句である。上手い。卒業式の日、今日を最後に学び舎を去っていく若き日の淡い感傷が謳われている。



写真10:時計台の側面図。博物館長の特別の案内で、細い急な階段を登り塔屋の上部も見学させて頂いた。時計の動力は電気やネジ巻き式でなく、分銅の上下動であった(設計図のオレンジ部分)。大時計の文字盤のシャフトに時計の器械部分が直接ついているのではなかった。器械本体は文字盤から遙か下にある塔内の床の上に据えられており(側面図では階段を登りきった処の上方フロア)、そして器械のシャフトと文字盤のシャフトは長いチェーンで繋がれていた。なるほど! そういう仕組みなのか。このような仕組みの時計塔は初めて見た。英国のピックベンのような巨大な歯車や振り子を装備する大仕掛けではない。智慧が詰まった109年前に建てられた時計塔であった。



写真11:大韓医院の時計塔内部。床に設置された時計のシャフトの回転が、長いチェーンで伝わって上部にある大時計文字盤のシャフトに伝わっていく。

大学病院は「白い巨塔」と言われる。しかし実際に塔をもつ病院建物を、私はこの大韓医院以外では知らない(1933年に米国人院長が建てた聖路加の塔は現在では病院の事業主であるキリスト教系学校法人聖路加国際大学の礼拝堂の塔である)。ヨーロッパの古都を散策すると必ず教会が町の中心にあった。というか、教会を中心に町が形成されていた。教会は地上と天上とをつなぐ建造物で、鐘塔または時計塔を兼ねている。教会の鐘楼や大時計は、きっと高い位置から町の人に礼拝時間を教える目的で建てられたのであろうと考えた。

### ■バビリオン方式の病院

さて大韓医院は、おそらくは衛生面への考慮からであろう、小高い丘の上に建てられている。現在、同じ場所に建っているソウル大学病院を訪問するときには、急坂を少し登る必要があった。大韓医院が建てられた20世紀初期の先進国では、大病院の設計

にはバビリオン様式が採用されていた。バビリオン様式では病院本館(玄関、管理部門、外来部門)を正面に据え、1〜2階建ての低層病棟を後方や横方向に配置する。そして本館と病棟、及び病棟間を渡り廊下で繋いだ。ベッドの増床が必要となると、新しい病棟を既存病棟の後や横に次々と建て、それらを渡り廊下で連結していけば良かった(写真12は京城帝国大学時代の病院)。その後、病院の設計は、それまでの平面での展開(バビリオン様式)から垂直方向への展開、すなわち病院建物の高層化へと移っていった。79年後の1978年に、苦しい財政状況の下で同じ敷地に建替えられた現在のソウル大学病院は11階建ての高層ビルとなっている。病院史を研究していくと、こういうことも判ってくる。新しく知っていくことは、実に面白く、楽しい。



写真12:バビリオン様式時代の京城帝国大学医学部附属病院。中央にある旧本館(車寄せのある塔付き建物)が現在の「医学歴史博物館」。後方の白い建物群が病棟。現在は11階建ての高層のソウル大学病院本院が建つ。大学病院時代の1930年代中頃から各科別の病棟へと分化しだし、1940年代には病床数は約400になっている。右下の車寄せのある大きな建物は大学医学部予科(現在の大学教養課程に相当)。

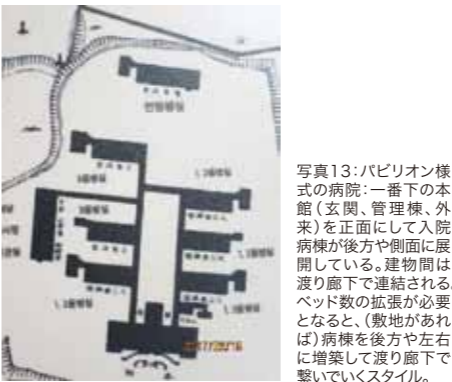


写真13:バビリオン様式の病院:一番下の本館(玄関、管理棟、外来)を正面にして入院病棟が後方や側面に展開している。建物間は渡り廊下で連結される。ベッド数の拡張が必要となると、(敷地があれば)病棟を後方や左右に増築して渡り廊下で繋いでいくスタイル。

### ■韓国最初の西洋式病院は今のソウル大学病院なのか、それともヨンセ(延世)大学セブランス病院なのか?

セブランス(世富蘭偲)病院では1904年開催の病院内講習会が発展して1909年に世富蘭偲医学専門学校を併設する。私立の学校である。その後、1912年セブランス聯合(れんごう)医学校、1917年セブランス聯合医科専門学校と発展し、1943年に旭医学専門学校へ改称した。セブランスの医専は朝鮮人または欧米人の教師による朝鮮人のための医学校で、1945年までの卒業生約千人は全て朝鮮人であった。

独立後の1947年にセブランス医科大学に昇格、1957年にヨンヒ(延禧)大学と統合し、私立ヨンセ(延世)大学が発足している。延禧と世富蘭偲から延世となったのであろう。ヨンセ(延世)大学はコリョ(高麗,Korea)大学とともに韓国を大代表する私立大学である。

さて、朝鮮の病院史では、「朝鮮最初の西洋式近代病院は現在のソウル大学病院であるのか、それ

ともヨンセ(延世)大学セブランス病院であるのか」が議論であり、韓国の学会ではソウル大学説とヨンセ(延世)大学説が静かに対立しているようだ(私にはそう思える。ただし不確かである)。20世紀初頭の済衆院からの病院展開をどう解釈するかによって見解が分かれてしまうのであろう。ソウル大学は先述の通り「廣惠院⇒済衆院⇒大韓医院⇒(京城医専)⇒ソウル医専(ここまでが前史)⇒ソウル大学医学部創設」を校史とする(次回説明する)。他方のヨンセ(延世)大学の説明では、前述の通り「米国プレズビテリアン教会は、1894年以降運営移管を受けている済衆院とは別の場所で、1904年にセブランス氏の浄財で新しい病院を建て、済衆院は新しい病院建物に移転して、病院名をセブランス病院に改称した」となる。当時、教会と朝鮮政府の間には病院運営を巡っての摩擦があった。済衆院は2つの流れに分かれていったが、では廣惠院を継承する病院としての主流はどちらなのか、という議論である。

ソウル大学とヨンセ(延世)大学は韓国における国立大学の雄と私立大学の雄である。またソウル大学病院とヨンセ(延世)大学セブランス病院も韓国を代表する病院である。もちろんソウルのBig5だ。近代的な西洋病院第一号がどの病院であるかは、医学史上最重トピックスだ。そのような名誉をおいそれと他校に譲るわけにはいかない。学者間の論争が続くようだ。



写真14:廣惠院の後継を説明するフローチャート(博物館の展示パネル)。下は1908年当時の大韓医院。廣惠院を源にして、上側の太い青色の主流が「大韓医院」ルート、下側の細い傍流が「セブランス病院」ルートを示している。

写真15はソウル大学での、写真16はヨンセ(延世)大学でのキャンパスでの風景で、どちらも自分は「廣惠院(済衆院)」の直系であることを示している。面白い。実際の「廣惠院」は現在のミヨンドン(明洞)にあるKEBハナ銀行の本店近くの憲法裁判所にあったそうだ。

写真15:ソウル大学のキャンパスにある「済衆院(廣惠院)」の記念碑。ハングル文字の説明文は私には判読できないが、きっと「ソウル大学病院は済衆院の後継である」という歴史が説明されているのだろう。



写真16:ヨンセ(延世)大学キャンパスの「延世歴史の庭」にある「廣惠院」の復元家屋(写真2参照)。ヨンセ(延世)大学はこういう歴史記念物を造り、キャンパスに据え付け、己の源が廣惠院であることを主張している。実に面白い(日本でも大阪大学は本物の適塾を保有している)。内部は展示室になっている。右後ろの建物はセブランス病院(Wikipediaの「延世大学校医療院」より転写)。

韓国病院史にこういった事情があるとは露知らず、私は拙著「日本病院史」(ピラールプレス、2014年刊。2017年にソウルで韓国語翻訳版が発刊)で、ざらりと「朝鮮最初の近代病院は現在のヨンセ(延世)大学セブランス病院です」と書いていた。外国人(日本人の私)が「最初の病院はセブランス」と書いたので、「ソウル大学の学者は機嫌が悪い」との事前の通知があった。さていよいよ、そのソウル大学病院の本丸である「ソウル大学 医学歴史博物館」を訪れる。冷や汗ものだ。

どちらが朝鮮最初の病院であるのか、そしてそれは解釈によって回答が振れるというミステリー的な事項を、学者達が眉間に皺を寄せて議論し、一喜一憂している。それもなんと楽しいことだ。なんとなく日本史における邪馬台国の畿内説対九州説論争によく似ている。門外漢の第三者としては、廣惠院はソウル大学病院とセブランス病院という、韓国を代表する2つの病院を生み出した素晴らしい病院、との位置づけで十分に満足である。

余談だが、日本の病院史にはこのようなワクワクする話題は見当たらない。日本の医学史では、「日本最初の近代西洋式病院はボンベの幕府立養生所(現・長崎大学病院)である」が定説となっている。確かに現存している病院で一番長い歴史を持つ病院は現・長崎大学病院である。しかし私は「日本最初の近代西洋式病院」という見解に少し疑問を持つ(室町・安土桃山時代の南蛮病院は議論から除外する)。私は長崎の養生所(1859年開院)より前に箱館(函館)に存在した初代ロシア病院(1858年〜1861年。焼失)の方が、近代西洋病院の第一号とするのに相応しいのではないかと考え、研究中である。枝葉末葉な事項であるが、これも面白い。

(今回はソウル大学歴史博物館での見聞を軸に、日本統治時代、および日本敗戦敗退後の韓国の病院、医学校を紹介する)。